

オーディオの総合誌 ステレオ

Stereo

2012
November

11

特集

エントリーモデルを侮るな!

～その機能を生かして新しい世界へ～

《完全保存版》

特別付録

全国オーディオ店ガイド

全国リアル店舗156店の紹介



名車XJ12を思わせる しなやかでパワフル しかも繊細な サウンドだ

オーディオ界のマエストロ
ティムが送り出した真空管プリメイン
熟達の設計と、ジャガーをイメージさせる秀逸なデザインが出色
photo:K.Kazama



V12

Pre-Main Amplifier
¥942,900

EAR spec

- 形式:クラスA級 パラレルプッシュプル
- 出力:50W/chステレオ
- 入力:5×line level unbalanced (RCA)
- テープアウト:1×Tape monitor
- 周波数特性:12Hz~60KHz -3dB(1/2パワー)
- 出力ダンピングファクター:10
- S/N:93dB (<0.4mV)
- 入力感度:400mV
- インプットインピーダンス:47kΩ
- アウトプットインピーダンス:4Ω、8Ω
- 消費電力:200W
- 重量:22kg
- サイズ:W420×D440×H135 (mm)
- 使用真空管:ECC83×10、EL84×12
- 問い合わせ先:ヨシノレーディングTel.050-3375-3975

EAR (エソテリック・オーディオ・リサーチ社) は1977年イギリス、ケンブリッジシャーに天才肌のエンジニア、ティム・ディ・パリチーニ氏によって設立された。彼は自身が主宰するEARブランドのアンプリブを設計・製造するだけでなく、他社のアンプリブ設計にも携わり、多方面で手腕を発揮してきた。1979年に日本へ輸入されたMichealson & Austinブランドの真空管式パワーアンプリブ、TVA-1の設計も彼が手掛けていたということは後に広く知られることとなった。



スタジオや音楽家の機器のモデファイが評判だった

その同時期にEARとしての処女作EAR509もリリースされた。本機はテレフンケン製PL509という、カラーTVに使われる水平偏向出力用の5極管をPP駆動し、100Wという大出力を実現したモノブロック・パワーアンプであった。このEAR509は日本ではあまり話題とはならなかったが、高いリアイアビリティと耐久性を誇り、海外での同社の評価を決定的なものとしている。また彼はコンシューマー用だけでなくプロフェッショナル・フィールドでも数多くの実績を残しており、1962年に登場したスチューダーC37という真空管式のマスター・レコーダーや、アンベックスATR100などのモデファイや、アナログ・カッティング・マシンのドライブ・アンプやマイク・アンプなどでも使用実績も上げている。

彼の仕事で印象に残るのは、100フィート級の古いクルーザーを改装したピンク・フロイドのプライベート・スタジオ「アストリア」での仕事。そこでは装備されているプロ用録音機材の改良と、設計したイク

トップメントもが稼働させている。またポール・マッカートニー所有のスチューダーJ37も彼の手を経て納入されたというように、録音エンジニアや音楽家たちの信頼が厚い。

859は駆動力と瑞々しい再現力で日本のファンにも知られる

しかし、日本でEARブランドの知名度、存在感を高めたのは1995年にデビューした一体型アンプEAR859であった。本機はビーム型出力管EL519をA級シングル駆動していたが、エンハンス・トライオード・モードと呼ばれる従来とは異なる斬新な3極管接続方式を採用していたのが大きな特徴だった。出力は13W/chとミニマムではあったが、余程効率の低いスピーカシステムでなければ、充分な駆動力を有し、音量的にもストイックな聴き方を強いられることはなかった。また真空管式アンプと聞いてイメージする懐古的なサウンドではなく、現代的な録音手法のソフトにも対応するフレキシブルな分解能を確保した。瑞々しいサウンドを実現し、再生ソフトの魅力や持ち味をありのままに引き出しつつ、ボーカルやストリン

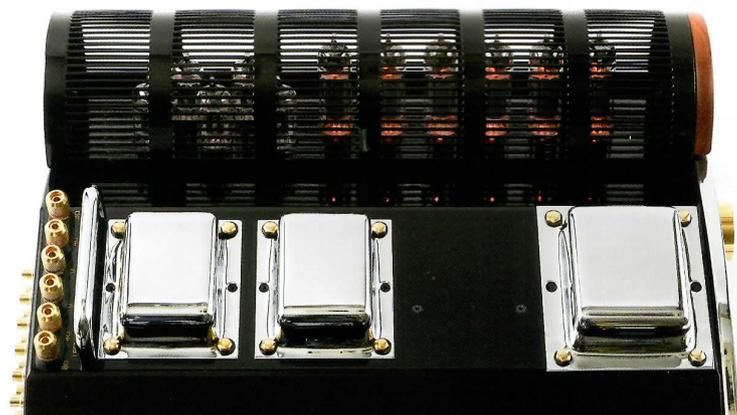
グスなどはつややかに再現してくれた。本機の登場によりEARは日本市場に確かな地位を確立するとともに、多くのシンパサイザーを生み出した感がある。

ジャグアーXJ12の12気筒エンジンにインスパイアされた

そんな同社の最新モデルが今回試聴の機会に恵まれたEAR、V12だ。本機は1997年に同社の設立20周年を記念して生み出されたV20の後継機と言える。

V20は傍熱双3極管ECC83/12AX7を片chあたり10本使用した、一体型アンプで、20W/chというパワーを有していた。このV20は無類のカー・マニアであるティム・デイ・パラビチーニが敬愛する、ジャグアーXJ12に搭載されていた、5・3リッターV型シングルカム12気筒エンジンにインスパイアされて設計したといわれていた。しかしV20はV12気筒エンジンに見立てた片バンクに10本の出力管を搭載していたことと、チャンネルあたり20Wというパワーを得ていたことでV20と名付けたのだらう。彼は、よりハイパワーを実現しつつ従来のない回路設計を採った新しいア

ンプにV12の称号を与えたかったのではないかと推察できる。いづれにしても両機ともデザインは明らかにV型エンジンを意識したもので、前述のEARの代表機EAR859のように真空管は直立状態ではなく、V型エンジンの左右バンクを連想させるよう傾けられている。その左右



V型12気筒を彷彿とさせる真空管をのぞく

バンクの中央、V型エンジンであればキャブレターやフェューエル・インジェクションなどの気化器がある辺りに、1基のパワー・トランスと2基のアウトプット・トランスが縦一列に並んでいる。シャーシ後方にトランス・ケース、そして前方に真空管を並べた古典的な真空管式アンプとは明らかに異なる、斬新なレイアウトを採っているのがVシリーズの特徴と言える。外観的には今回のV12はV20に酷似し、サイズも重量もほぼ同じではあるが、細部にわたり見直しを図り、同社一体型アンプのフラッグ・シップとなるべく再設計された。

日本市場に姿を現したV12は、V20が左右合計20本の出力管を搭載していたのに対し、10本のECC83と左右ch合計12本のEL84出力管(片ch6本)を搭載する設計としたことで、名実共にV12という称号にふさわしい製品となった。しかもパワーは50W/chという実効最大出力を実現。1972年に完成したジャグアーXJ12の5・3リッターエンジンが、1981年にHE(Hi-EFエフェシエンス)タイプとなり、日本仕様で295HP/5500rpm(DIN)というハイパワーを得たように、今回のEARの

V12は、それに匹敵するハイパワーを手に入れたと言えるだろう。

ジャグアーXJシリーズは比較的大きなサルーンであり上質な乗り心地を得ながらも、そのサイズを意識させることなく、スポーツカーを思わせる正確な高速コーナリングが可能であったが、あくまでも優雅な身のこなしで、コーナリーを立ち上がるのが英国車らしいところだ。その最強モデルのXJ12では充分なトルクを得て、どのような場面でもドライバーが必要とする加速とスピードを得ることができると言える。今回のEAR V12も充分なパワーを得ることで現代的な低燃費スピーカーも意のままに鳴らしきり、音楽を生きいきと再生してくれると予測できた。

長い実績を誇る 独自の回路を さらにリファインした

本機は前述のように傍熱式の5極管EL84を片chに6本搭載しA級動作、パラレル・プッシュアップル駆動することで低歪化と直線性を高めている。またアンプにとつて必要悪的なNFBを使わず、彼が長年にわたつて使っている「バランス・ブリッジ・モード」と呼ばれる独自の回路をリファインして採用しているのも

特徴だ。これにより広帯域特性を実現するとともに安定性を向上させているが、それを支えているのは彼自身が手巻きで完成させたスペシャル・トランスであるという。結果として最大出力の1/2(25W)出力時で12Hz~60kHz・3dBという広帯域特性が実現されている。それでいて93dBという高SN比(80・4mV)を確保するなど確実な進化が見てとれる。入力端子はライン系を5系統備し、PHONOと表記された入力端子を備えているが、フォノEQ回路は内蔵していないので、フォノEQアンプが必要になる。スピーカー出力端子は片chあたり3個用意され使用スピーカーのインピーダンスに合わせ4オームと8オームを選択使用できる。

同ブランドの製品は1995年に登場したEAR859から、ことさら真空管式アンプという事を意識させることのない広帯域、高SN比、高分解能を実現してきたが本機もその例外ではなかった。一聴しただけで、1/2出力時の再生周波数特性が6Hz~60kHz(・3dB)という最新半導体アンプにも負けないスペックは伊達ではないと思わせられた。そして聴感上でも両エンドがスムーズに伸び、周波数特性やSN比の良



上面からのV12



オリジナル制作のトランスが際立つ

さを感じられるアキュレートな音だが、クールな表現や無機質な響きを聴かせることなく音楽を瑞々しい表情で再現し、ボーカルなどは適度な温もりと潤いがあるが、質感や鮮度感を損ねることがない。

超低域の マッシブなビートも 難なく再現、 真空管の魅力をも 拡大した

ケルテス指揮の「新世界より」の冒頭部の静けさは秀逸でストリングスの色彩感やハーモニーの美しさ、そして中低音域の豊かな響きはアナログ・マスターならではの低音楽器の音像を不鮮明にすることはなく、そして第4楽章の迫力あるトゥッティも安定感があり大編成オーケストラならではのスケール感がリアルに甦る。

またアナログ・マスター→DATというプロセスでデジタル化しCD・Rに1枚1枚ダビングした「グリーン・スリーブス」(CD・1004MQ)は通常CD以上のDレンジを確保し情報量や鮮度を高めているが、本機は、その違いを正確にサウンドに反映させた。

試聴曲は、転調がありミュージシ

試聴曲

- ①ドヴォルザーク:
交響曲第9番「新世界より」ケルテス、
グランドスラムGS2081
Track1:第一楽章
- ②Track2:第四楽章
- ③「グリーン・スリーブス」
ウディクリークCD-1004MQ
Track5:
Have You Met Miss.Jones
- ④「Peter Pau I & Mary」/
The Very Best Of」
キングインターナショナル
0811227 076095
Track:15:Early Mornin' Rain
- ⑤「FRANK SINATRA」/
Nothing But The Best」
キングインターナショナル
081227 976101
- ⑥「ルネッサンス/マーカス・ミラー」
ビクターエンタテインメント
VICJ-61665
Track8:Revelation

ヤンは息を抜けない「Have You Met Miss Jones」だが軽快にスイングする演奏を展開するトリオの音像が、実在的に浮かび上がる。ドラムスとベースを送り出す、アフタービートを利かせた、快調なリズムをバックにピアノが紡ぎ出す音数の多いアドリブ・フレーズも、一音一音のタッチが明晰で表情豊かに再現された。さらに小音量で再生してもウッドベースの胴鳴り、キックドラムの音圧感のリアルさが失われないのも、アナログ・マスターの効果であると同時に、本機の強みと言えるだろう。Dレンジの広さを要求されるドラム・ソロにも的確に反応し、厚みのあるキックドラムのアタックもダビングが利いている。音場も広がりとお興行きを感じられ、本作をライブ録音したホールのサイズを正確に再現するなど、再生ソースの音楽をありのままに再

構築することができる。
最後に聴いた「ルネッサンス」は、20〜30Hzという超低音のマッシブなビートが連続するので、並の真空管アンプでは低域の制御が難しくなるソフトだ。そんな低音のビートも制動を甘くすることはなく、高い解像度も確保されている。
エネルギーシユなサックス・ソロのフリーキーなトーンも粗さがなく、E・ベースのスラッピング奏法のアタック音もスムーズに立ち上がり、耳障りにならないのは単にパワーだけを高めたアンプでは得難い部分であり、XJシリーズのしなやかな足回りに通じる英国ブランドならではの美点と言えるかもしれない。
V20よりも性能を高めながら、価格を引き下げ、現地価格と比べて充分納得できるプライスタグをつけた同社の良心的姿勢にも好感が持てる。